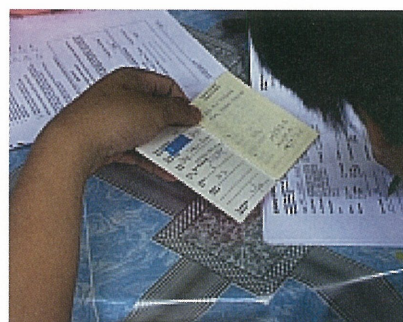


閲覧 ニュース

96号

2005. 4



ロボットと暮らす日

赤澤 とし子

「オハヨウゴザイマス。起キル時間デスヨ。モーニングコーヒーアドウゾ。」「ありがとう『花子』。」「おじいちゃんは？」『太郎』とオ散歩ニ出カケマシタ。今、〇〇公園ノベンチニ腰カケテイマス。脈拍モ血压モ体温モ正常値ノ範囲デス。」ここで登場した「花子」は我が家のヒューマノイド（人間型ロボット）で、おじいちゃんと散歩に出かけて、現在地の映像とバイタルデータを「花子」に送信してくれたのはペット型ロボットの「太郎」だ。……これは私の想像の話だが、一家に一台は「マイ」ロボットがいて、こんな会話を交わしながらロボットと暮らす日もそう遠い未来のことではないかもしれない。より人間に近づいたパフォーマンスを披露するヒューマノイドや進化するペット型ロボットを目にすると、ついそんなことを考えてしまう。産業用ロボットとは異なるパーソナルロボットという新しいロボットの登場によって、ロボットの存在がぐっと身近なものになったようだ。

ロボットの活躍の場は今や工場だけでなく、病院や高齢者施設、一般家庭へと広がりを見せ始めている。患者にやさしい医療用ロボットや超高齢社会を見据えた介護支援ロボット、働く女性にとって強い味方になってくれそうな掃除、洗濯などを手伝ってくれる家事支援ロボットへの期待は大きい。そうしたいわゆる人間に代わって労働するロボットとは異なり、話し相手になる、心を癒してくれる、励ましとなって生きがいを見い出す手助けとなってくれるようなコミュニケーション能力やエンターテインメント性を備えた自律型のパーソナルロボットも気になるところだ。ロボットとの対話やふれあいが、人間を元気にしてくれるというセラピー効果を期待する新たな「ロボット力」に注目するものだ。

21世紀は、人間でも、ペットでもない第3のパートナーとしてのロボットとうまく助け合いなが

ら共存していく社会を現実のものとして考えなければならない時代かもしれない。そんな未来がやってきたとき、人間はロボットとどういう関係を築き、共存していけばよいのだろうか。いかに「ロボット力」が優れ、限りなく人間に近づいたとしても、やはり人間でなければならないこともあるだろうし、人間と人間の間を築くこと自体が喜びとなることもあるだろう。逆に、今は人間だけに頼っているが、実は、人に頼むよりはロボットの方が気兼ね無くやってもらえるからいいということもあるだろう。いったい私たち人間にとってロボットとは何なのか。ロボットに何を期待し、どんな「ロボット力」を求めていくのか。それはロボットの存在意義を考えることであるが、同時に、人間とは何か、人間にしかできないこと、人間にとって大切なことは何か、「人間力」とは何かといった人間の存在自体を考えることにつながる。

ロボットの時代は、機械という人工物であるロボットを通して、改めて人間を考える、人間を見つめ直す好機のように思える。現在のロボットは、少子・高齢化や世帯の小規模化、人と人との繋がりが希薄化し、コミュニティの崩壊が心配されるなどといった社会構造や私たちを取りまく環境が大きく変化する中で進化してきたものだ。人間や人間社会が変わればロボットも変わる。そして、ロボットが変われば人間の未来も変わっていく。ロボットの時代だからこそ、なおのことより良い未来を切り開いていくための「人間力」が問われるのだ。「ロボット力」と「人間力」の調和がとれてこそその共存である。北里大学は人間の「心」と「身体」を様々な角度から学ぶのにとってもよい環境だ。そんな中で、ロボットの存在、進化を意識しながら、人間をじっくり科学してみるのもおもしろいかもしれない。

（人間科学教育センター・経済学）

ことば・コトバ・言葉

少し前の話になるが、皆様にはご記憶にあるかと思う。昨年12月にノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイさんが2月に来日された。京都議定書の発効にあわせての招待である。地球環境問題の記念行事やシンポジウムを各メディアが報じていた。マータイさんの活動の詳細についてはここでは省く。メディアが過剰なほど反応したのは彼女の次の言葉であった。

「もったいないという日本独特の言葉に感銘した。これを世界に発信すべきです」と。「もったいない」という言葉はケニアにはないらしい。言葉ばかりか、日本人が忘れかけている感性であり精神とも言える。外国人に指摘された時、改めて言葉のもつ豊かさやその背景に気づいたということかもしれない。

「資源の持続的活用を訴える上で探し求めている言葉に出会った感動の瞬間だった」とマータイさんは云う。この記事を目にした時、普段はとりたてて意識もせずに気ままに見聞きしている日本語の持つ豊かさやチカラに、逆に励まされ感動した一瞬でもあった。言葉の意味だけではなく、おおげさに云えば、その思想と感性、日本人の精神や美学ともとれる。私たちが言葉を発した時、それは音声によって相手に伝えられる。相手に受け取られて始めて完結し、コミュニケーションの手段としては成立する。

私たちは「ことば」で、どれだけ正確に自分の思いや意志を伝えきれているであろうか。今、「この状況の中で瞬間」、最もふさわしい「ことば」はなにか、各々の感性でチョイスしているはずである。ゆたかな日本語を駆使して思いのたけを表現しているか、実のところ、自信はない。ここ数年来の日本語ブームや朗読の盛り上がりは必然であった。美しい日本語を再認識したいという日本人が持つ感性が背景にあったのブームである。「日本語」ブームのきっかけを作ったとも言える齊藤孝著「声に出して読みたい日本語」(草思社、2001)を始めとして、「日本語・言葉・ことば」関係の書籍が教養図書館では充実しています。参考のためその一部を紹介してみます。

大岡信著「日本語の豊かな使い手になるために」太郎次郎社、2002

「ことばの教育」にたずさわる現場の教員たちが「ことばの危機」に直面しているという。「言語

というものが本来社会的な存在」ゆえ、言葉にしてい言表す術を持ってない現代の子どもたちや若者は社会の中で孤立化していくという。一人ひとりが孤立した社会状況の中で「ことば」をどのように育て、学び、引き寄せていくか、「ことばと社会の構造との関係」など、いろいろな角度から「ことば」について考えさせられる内容である。

「日本・日本語・日本人」新潮社、2001

大野晋、森本哲郎、鈴木孝夫の「日本人とことば」をめぐる鼎談。「言葉がどれほど人間の精神と深く結びついているか」を自覚することが必要と説く。大野晋著作では他に「大野晋の日本語相談」(朝日新聞社、2002)「日本語練習帳」(岩波新書596、1999)などを含め著者名検索をすると45件が表示される。鈴木孝夫著作に「閉ざされた言語・日本語の世界」(新潮社、昭和55)他「ことばと文化」「教養としての言語学」など9件表示された。丸谷オ一著「日本語のために」(新潮社、昭和49年)は「国語教科書批判」「当節言葉づかい」がその内容である。NHKアナウンサーでナレーション、朗読、またエッセイストとして活躍中の加賀美幸子著「こころを動かす言葉」(海竜社、2000)「ことばを磨く18の対話」(NHK出版、2002)も参考になる。その著作の中では「人生はメッセージ探しの旅のような気がする」と書いている。言葉にまつわるたくさんのメッセージがこめられた本である。まだまだ言葉を主題とした図書を教養図書館では多数所蔵しています。最後に東郷克美著「きれいな日本語が聞きたい」(ゴマブックス、2002)を紹介して終わります。「どんな民族の言葉も、それが成立する過程では必ずその土地の風土や文化が影響する。たとえば、雨の多い日本では五月雨、驟雨、梅雨、秋雨などの雨を表現する言葉」などを一例として、季節、気候を表現する言葉は実にゆたかです。また、最近あまり聞き慣れませんが、「艶やか」「たたずまい」「奥ゆかしい」「身づくろい」「言わぬが花」「はんなり」「ゆかしい」「面はゆい」「心映え」「幽けし」などなど、なんと美しく「たおやか」な日本語ではありませんか。ちなみに「たおやか」とは女偏に弱いと書きます。「日本女性を表現する言葉の中でもっとも適した言葉」だそうです。それこそ「面はゆい」ばかりです。

(教養図書館・潮田万弓)

献 血 随 想

小 林 亜津子

表紙の写真は、マレーシアの献血風景である。マレーシアでは、日本と同様、輸血や血液製剤に必要な血液は、献血（無償）によってまかなわれている。写真には、2003年8月の独立記念日に、民間のボランティアが、カフェ・レストランを会場にして、献血を行なっている様子が紹介されている（出典 <http://tonyjsp.cool.ne.jp/gallery/bd/gallery-bd0308.html>）。興味を抱いて下さった読者には恐縮なのだが、今回、紹介したいのは、マレーシアの話ではなく、献血にかんする私自身の体験談である。私にとって「献血」は、その後の自分のあり方を大きく変えてしまう「転機」のようなものだったのである。

私自身が初めて献血をしたのは、18歳、高校3年生のときである。友達に誘われ、何気に協力した「献血」が、私に思いも寄らない結果をもたらすことになった。献血後一週間ほどして、コレステロールや、GPT、GOT など、自分の血液についてのデータが郵送されてきたのだが、そのとき、何やら青い紙に赤い文字で仰々しく書かれた文書が同封されていた。ふと見ると、「Rh マイナス登録のお願い」と書かれてある。「えっ？」と思い、詳細に目を通すと、とりわけ日本では数の少ない Rh マイナスの人に対して、必要時に献血をしてもらうよう赤十字に登録してほしいという趣旨であった。

高校の生物の授業で、「日本でもまれに Rh マイナスの人がいる」と習ったばかりの私は、まさか自分が…と、心底、驚いた。私の両親はともに「Rh プラス」である。ちょうど「遺伝」についての授業を受けて、両親がともに＋だったのだらうと思われたが、さらに、両親にさり気なく聞いてみると、自分たちの血縁者に、Rh マイナスの人がいたという記憶がないといわれ、子どもの頃、両親から「橋の下で拾ってきた子だ」と言われた

話は、もしかしたら本当ではなかったのかとも思った。「登録」した上で「お願い」された献血も、一般の献血と同様に無償であり、また、協力したからといって、自分に輸血が必要になったときに、優先順位を上げてもらえることもないと確認したうえで、登録してみた。

その後、2、3 か月に一回程度の割合で、赤十字から電話が入り、「がんの患者さんが手術で輸血が必要になり…」などと言われ、最寄の赤十字センターへ出向くことになった。一般の献血と同様、献血前に、血圧や血糖値を測られるのだが、血圧も血糖値も、平均値よりかなり低い私（血圧は今でも上が86くらいであり、一限の講義はかなりつらい）は、大抵、献血前に、お菓子を勧められ、血糖値だけでも上げるように言われた。採血のときに、ふとテーブルの上の献血者リストのようなものを見やると、東京都内での今回の献血者は、私を入れて6名だった。

献血後、ジュースやお菓子などをふるまわれ、ソファで休んでいると、「無償」と言われていたのに、毎回、1000円相当のテレフォンカードや JR のプリペイドカードなどをもらった。こうした「献血」は、私が東京にいた間、ずっと続いていたが、京都へ行ってからは、体重が献血可能な値（40キロ以上）を下回ってしまったため、やめざるを得なくなった。

ちなみに、私は、献血をするまで、自分の ABO 式の血液型も知らなかったのである。それまで、自分は几帳面で協調性に富んだ A 型に違いないと確信していたのだが、帰ってきた結果は「B」であった。ラベリング効果か、自己暗示か。それ以来、私はすっかりマイペースな人間になってしまったのである。まことに、献血恐るべしである。

(人間科学教育センター・倫理学)

閲覧ニュース96号

2005.4 発行

北里大学教養図書館

〒228-8555 相模原市北里 1-15-1

発行責任者 大林 康二

電話 (042) 778-8005